

共同研究 ● モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究  
—国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に (2014-2017)

### 多田コレクションの意義

20世紀に入ると玩具・衣服・文具などの子どもの生活用品が商品化され市場に登場するが、その多くは消費財だったために、子どもに関するモノの研究はこれまでほとんど顧みられることはなかった。

そのようななかで、大阪府より国立民族学博物館へ寄贈された多田コレクション（通称「時代玩具」：大阪府指定有形民俗文化財）は、江戸時代から戦後の高度経済成長期にかけての玩具を中心とした子どもに関わるモノが、網羅的に収集・保存された極めて貴重な資料であるといえるだろう。

この多田コレクション（①）と類似する資料として、現在確認される主なものは②入江コレクション（兵庫県立歴史博物館所蔵）、③田中本家博物館（長野県須坂市）所蔵資料、④土井子供くらし館（三重県尾鷲市）所蔵資料の4件があげられる。

②は、①の収集者多田敏捷の協力のもとに成り立っており、両者は深い関係にある。③④はそれぞれの旧家（田中家・土井家）の土蔵に奇跡的に残されていたもので、保存状態も良

く、所蔵者や年代などもある程度特定できるが、年代（明治後期から大正期）、階層（豪商）に偏りがある。一方①②は網羅的だが、後年収集された資料という性格上、制作年代などを含めて批判的検証が必要だ。

たとえば、①に関しては、収集者自ら『おもちゃ博物館』全24巻（京都書院1992）を著しているが、趣味的な見地から概要を紹介することに止まり、学術的な研究の活用には不十分である。おそらくこの問題は各方面の専門家が類似資料と比較・検証を行い、関連情報を収集することで、ある程度解決できるであろう。

本研究は、児童学・美術史・玩具史・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といったさまざまな専門分野の研究者が、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群を総合的に検討することで、近代日本における子どもの社会と文化の形成過程を、モノをとおして実証的に解明する初の試みである。

### モノの発信力

では、日本の子ども研究におけるモノの発信力とは何か。フランスの歴史家フィリップ・アリエス（Philippe Ariès：1914-1984）が、アンシャン・レジーム期のフランス社会の生活を洗いだすことを通じて、「子ども」および「子ども期」という考え方が、近代的な家族の形成にもなって現れることを明らかにしたことは、よく知られている（アリエス1980）。つまり子ども期は、一種の近代的な「制度」、歴史の一時期につくりだされた社会的観念だ、というのである。そして近代日本の子どもも明治以降に誕生する。

近代国家の建設を目指し、さまざまな制度が整備されるなかで、日本でも新しい子ども期（学校で教育され社会や家庭で保護される存在）の必要性が高まる。明治政府は、近代国家を担う国民として子どもを育成するために、欧米的な教育制度をとり入れ、1872（明治5）年に学制を公布したが、近代日本の子どもは、まず義務教育の対象として上から強制的に生みだされたといえるだろう。従って押し付けられた教育（子ども）観を民間人が内面化する過程は、教育制度史をはじめとする、いわゆる公的な史料には、容易にあらわれることはない。その解決のための手がかりとして、モノが貴重な役割を果たすのである。

### 教育と玩具

たとえば、多田コレクションには、おびただしい玩具が所蔵されているが、その1つに1900年代頃のものと思われる「教育玩具御座敷遊」がある（『おもちゃ博物館』第18巻巻頭）。玩具の語源である「もてあそびもの」という意味から考えれば、子どもの遊び道具としての玩具は、人類の起源と同じくらいの昔まで遊ることができよう。しかし玩具を教育の手段として捉え、それによって子どもの能力を高め、成長を促そうとする考え方は、日本では遊びをとおして教育す

多田コレクションをもとに、江戸時代後期から戦後高度成長期までの幅広いモノが展示された「みんなくおもちゃ博覧会」が、2014年、民博および宮城県内4会場で開催された。

るという幼児教育（フレーベル思想）が紹介されるまで、ほとんどみられない。

江戸時代、玩具は縁起物的な色彩が強く、どちらかといえば粗雑なものと考えられていた。また玩具である人形に素朴な信仰心（病気や災いから守るヒトガタなど）が融合して、子どもの健やかな成長を願う人形祭り（雛祭）が18世紀中頃確立するが、玩具人形によって知的発達を促進するという発想はどこにもみられない。

このように考えると、玩具に教育的な関心が向けられるまでのプロセスは、日本人が近代教育の対象として子どもを意識しはじめるまでの過程と、どこかでつながるに違いない。

そしてそのことは、明治期に巷で流行する「教育玩具」という造語の変遷から読み取ることができる（是澤 2009）。

### 教育対象としての子ども

1890（明治23）年頃「教育玩具」が商品化され、1900年（明治33）前後には「教育〇〇」という名前をつけただけの羊頭狗肉ともいえるものが流行し、そして1910年代（明治43～大正8年）年代にかけて、教育的見地に立った玩具の改良がはじまる。それとともにさまざまな子ども用品が商品化され、都市部を中心に就学準備教育を目的とした私立幼稚園が急増する。おそらくこの頃から、子どもに教育が必要であり、それによって身につけた学歴が、就職・結婚・世間体などに影響し将来生活していく上で有利な条件になることが、社会通念となりはじめる。そして一部の人々の間（都市部の新中間層など）に、近代教育をうける対象として幼児を含む子ども全体が意識されはじめるのであった（是澤 2009）。

今日、デパートの玩具売り場をのぞくと、子どもの発達に役に立つと銘打った商品が何種類も並べられているが、その源流が、遊びと教育が一体となった「教育玩具」という造語に写しだされているのである。

### 市民生活を写す鏡

「玩具は大人が子どもに投げかけた議論から生まれたものだ」とヴァルター・ベンヤミン（Walter Bendix Schönflies Benjamin：1892-1940）はいう（ベンヤミン 1981）。確かに玩具を創りだし、与える役割は主に大人だ。もはや遊ばれることなく博物館に展示される玩具をはじめとする子どもの生活用品は、子どもというフィルターをとおしてみた大人自身の姿であり、市民の生活を敏感に反映する鏡ともいえるだろう。そこには子どもに対する夢や希望、願いなど、大人のおもいが映しだされている。そのネーミングやデザイン、用途、素材など、あらゆるものが文献には容易にあらわれない、時代の生活意識を無言のうちに証言しているのだ。

多田コレクションの「教育玩具御座敷遊」という教育という名前がつけただけの何の変哲もないママゴト遊びの玩具にも、近代の息吹が立ち上っている。20世紀初頭の日本の玩具



「教育玩具御座敷遊」1900-10年頃（多田敏捷編『おもちゃ博物館』第18巻（京都書院）より転載）。

業界の広告は「教育玩具」販売をなめる業者であふれていた。「教育」の二文字は一部の消費者の心をくすぐる絶好の口説き文句であった。つまりこの頃すでに、それを受け入れる一定数の市場が、形成されていたのだ。

### 近代と子ども

これらのモノが、日本における教育対象としての子どもの誕生の過程を、無言のうちに映し出しているように、おそらく文献資料にはあらわれない、もう1つの近代日本をさぐる手がかりが、他にも数多く潜んでいるだろう。

社会構造の変化にともない近代的な子ども観が根幹から揺らぎ始めた今日、近代日本における子ども観の源流とその形成過程の解明を目指す本研究の成果は、子育て不安や次世代教育などの子どもを巡るさまざまな問題を整理するために、有益な知見を提供することが期待される。近年の少子高齢化社会において、子どもを巡るさまざまな問題があらわれているが、保育・教育現場の技術的な側面に議論が偏りがちな今こそ、まず「子どもとは何か」を再検証することが必要である。

本研究が文献ベースのアプローチとは異なるその基盤づくりの一翼を担うとともに、同コレクションを中心とするモノの展示会を開催することをとおして研究成果を広く社会に還元することができれば幸いである。

### 【参考文献】

- アリエス, P. 1980『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信他訳、みすず書房。
- ベンヤミン, W. 1981『教育としての遊び』丘沢清也訳、晶文社。
- 是澤博昭 2009『教育玩具の近代—教育対象としての子どもの誕生』世織書房。

### これさわひろあき

大妻女子大学准教授。専門は児童文化史（主に子どもに関わる生活文化・節句行事などの研究）。著書：『日本人形の美』（淡交社 2008年）、『青い目の人形と近代日本』（世織書房 2011年）、『決定版日本の雛人形』（淡交社 2013年）他。各地の人形玩具関連の展示会の監修指導のかたわら、近年は祭礼に使用される山車人形の調査などにも従事。